

5章－1 江戸時代の文化

問題

■確認問題

- 1 酒井田柿右衛門
- 2 浮世草子
- 3 国性爺合戦
- 4 市川団十郎
- 5 鈴木春信
- 6 洒落本
- 7 恋川春町
- 8 雨月物語
- 9 河竹黙阿弥
- 10 喜多川歌麿
- 11 司馬江漢

【1】

■解答

- 1 1549
- 2 大友義鎮（宗麟）
- 3 イエズス
- 4 ルイス=フロイス
- 5 豊臣秀吉
- 6 バテレン追放令
- 7 ガラシャ
- 8 天正
- 9 ポルトガル
- 10 南蛮
- 11 活字印刷機
- 12 カルタ
- 13 高山右近
- 14 千利休
- 15 フランシスコ
- 16 支倉常長
- 17 シドッチ
- 18 新井白石
- 19 西洋紀聞
- 20 日米修好通商
- 21 隠れキリシタン
- 22 五榜の掲示
- 23 フルベッキ
- 24 岩倉遣外
- 25 6

■解説

1549（天文18）年のザビエルの来日およびキリスト教伝来から1873（明治6）年のキリスト教の解禁までをテーマとするキリスト教小史ともいべき問題。若干の難問が含まれているが、全体に各時代の代表的な事項を精選した標準問題がほとんどで、概して良問となっている。

- 1 フランシスコ=ザビエルが来日したのは1549（天文18）年である。16世紀の宗教改革の拡大によって欧州の教勢が衰退したカトリックは、新教に対する反宗教改革の動きを活発化した。この反宗教改革の中で独特の活動をしたのが、スペイン人のザビエルがロヨラとともに1540（天文9）年に創設したイエズス会である。イエズス会はアメリカやアジアなどの新天地でのカトリック教布教を拡大して、カトリック教の勢力回復をめざしたのである。ザビエル自身も1542（天文11）年にインドへ到着し、1549（天文18）年には布教のため来日し、さらに、1552（天文21）年に中国での布教活動の最中死去したのである。
- 2 豊後の戦国大名とは大友義鎮（宗麟）で、洗礼名フランシスコというキリシタン大名になり、南蛮貿易を奨励するとともに天正遣欧使節を派遣した。島津氏との戦いで衰退して豊臣秀吉に服属した。義鎮の死後、大友氏は朝鮮出兵で失態を演じ、秀吉によって廃絶となった。
- 3・4 信長・秀吉の知遇を得て『日本史』を著した宣教師とは、イエズス会のルイス=フロイスである。ルイス=フロイスは、イエズス会所属のポルトガル人宣教師で1563（永禄6）年に来日して、1587（天正15）年のバテレン追放令が出されるまで日本での布教活動に従事した。追放後にも再来日し1597（慶長2）年に長崎で死去した。
- 5 1587（天正15）年、九州征伐後にキリスト教信仰の制限と宣教師の追放を命じたのは豊臣秀吉である。秀吉がキリスト教を弾圧しようとした理由は、長崎が教会領となっていたり、キリシタン大名がキリスト教会の影響下にあるのを実見したりして、自己の支配に対する脅

- 威となるおそれを感じたためと推測されている。
- 6 5の命令をバテレン追放令という。秀吉は大名のキリスト教信仰を許可制としたが、一般民衆の信仰はとくに禁圧はしていない。当時のキリスト教と一体化していた南蛮貿易の促進をはかったため、その実効性は低かった。
 - 7 明智光秀の娘で後の肥後熊本藩の大名となった細川^{ただあき}忠興の妻は、ガラシャ夫人、日本名玉である。ガラシャ夫人は、関ヶ原の戦いに先立ち、大坂の細川屋敷を西軍に攻囲されて死去した。
 - 8 1590（天正18）年に帰国した4人の少年使節は天正遣欧使節と呼ばれている。この使節は大友義鎮・大村純忠・有馬晴信らのキリシタン大名が、イエズス会宣教師のヴァリニャーニの勧めで派遣したもので、正使の伊東マンショ・千々石^{ちぢわ}ミゲル、副使の中浦ジュリアン・原マルチノの4人である。ヴァリニャーニには天正遣欧使節の派遣によってイエズス会の日本布教の成果を宣伝するとともに、カトリック教諸団体の中での優位を獲得し、ローマ教皇からの報奨金を獲得するという目的があったとされている。
 - 9・10 当時の日本に伝わった西欧諸国のキリスト教的文化を南蛮文化といい、その中心となった国はポルトガルである。南蛮文化とは南蛮人の伝えた南欧文化で、主にポルトガル系のキリスト教文化ということになる。
 - 11 『天草版平家物語』などは、1590（天正18）年に天正遣欧使節の帰国に随行して来日したヴァリニャーニが伝えた活字印刷機によって刊行されたものである。なお、『天草版平家物語』は1592（文禄元）年に天草で刊行されたものであり、全文ポルトガル系ローマ字で記述されている。このような刊行物をキリシタン版あるいは天草版という。
 - 12 後に花札となるものはカルタ（加留多）で、元々はポルトガル語であったものが日本語化したものである。
 - 13 高槻^{たかつき}城主のキリシタン大名とは高山右近である。右近は、摂津の国人で初めは荒木村重に属し、織田信長に反抗した村重から預かった城を放棄して信長に属し、さらに、本能寺の変直後には明智光秀に属さずに秀吉方となり、後に播磨国明石城主となった。1587（天正15）年のバテレン追放令で明石城主の地位を失い、加賀の前田家の客将となった。1614（慶長19）年の禁教令でマニラへ追放され、翌1615（元和元）年に死去した。
 - 14 「侘び茶の大成者」とは千利休（宗易）である。侘び茶は東山文化の頃村田珠光が確立し、武野紹鷗を経て千利休が大成したとされる。利休は妙喜庵待庵などの茶室建築を残し、また、信長や秀吉の茶頭として権勢を持ったが、後に秀吉の命令で自刃した。
 - 15 ルイス＝ソテロが所属したのはフランシスコ会である。フランシスコ会はイタリア・アシジの聖フランシスコが創設したカトリック教団で13世紀始めに修道会に認定された。1592（文禄元）年にイスパニア使節とともに来日して日本への布教を開始したが、先行して日本で独占的に布教していたイエズス会と対立し、バテレン追放令を無視して布教を強行したため1596（慶長元）年にサン＝フェリペ号事件を契機とした26聖人殉教事件を引き起こした。江戸時代になると家康に接近して東日本での布教を進めた。
 - 16 仙台藩主伊達政宗の命令でメキシコ経由でローマへ派遣された伊達藩士とは支倉常長で、1613（慶長18）年に日本を出発して、太平洋を横断してノビスパン（メキシコ）へ至り、さらに、大西洋を横断してスペイン、ローマへ到着した。その目的は、メキシコとの貿易交

渉だったが、不成功に終わった。この使節を慶長遣欧使節という。常長は帰国後は幽閉状態の生活を余儀なくされた。

- 17・18・19 1708（宝永5）年に日本に密入国したイタリア人宣教師とはイエズス会のシドッチで、江戸に送られて投獄され、1715（正徳5）年に獄死した。このシドッチを尋問したのは新井白石である。白石は、この時の尋問をまとめて『采覧異言』5巻や『西洋紀聞』3巻を著した。前者は将軍に献上され、後者は幕府の秘本とされた。
- 20 一般にはあまり知られていないが、1629（寛永6）年頃長崎で始まった絵踏が中止される契機となったのは日米修好通商条約の締結である。
- 21 江戸時代に密かにキリスト教の信仰を維持し続けた人々たちを、隠れキリシタン（潜伏キリシタン）という。
- 22 キリシタン禁制を継続した太政官の命令とは五榜^{ごぼう}の掲示（五種の高札）のことで、五箇条の誓文が諸侯や公家など支配者層を対象とした施政方針であるのに対して、五榜の掲示は庶民に対する訓戒で旧幕府時代の民衆統制策を踏襲したものである。この中で明治政府はキリスト禁教を明示した。
- 23 1859（安政6）年以降、長崎で大隈重信ら維新の功臣に洋学を教授したアメリカ人宣教師とはオランダ生まれのプロテスタント宣教師のフルベッキである。1869（明治2）年には開成学校教頭や政府顧問、明治学院教授なども勤めて、1898（明治31）年に日本で死去した。
- 24・25 23のフルベッキが献策して、さらに、顧問として実現した遣欧使節とは岩倉遣外使節のことである。使節はまずアメリカを訪問して、条約改正予備交渉を行ったが、日本の未開性などを指摘されて、交渉すらままならなかった。このため、使節団は、日本の近代化・欧米化の必要性を痛感して、1873（明治6）年キリスト教解禁に踏み切ったのである。

【2】

解答

- 1 ミ 2 ホ 3 シ 4 ツ 5 セ 6 コ 7 ニ 8 ム
9 キ 10 ネ

解説

- 1 戸田茂睡は江戸時代前期の歌学者。その著『梨本集』では従来の歌学が伝統的権威に安住しているとしてその打破を唱え、中世以来の制^{ことば}の詞（和歌に用いることを禁じられた言葉）などの拘束を非難した。
- 2・3 『万葉代匠記』は僧契沖^{けいちゅう}が師匠の下河辺長流^{しもこうべちやうりゅう}に代わって著した『万葉集』の註釈書。書名は師匠に代わって著したことからつけられている。契沖は文献学に基づいた古典研究に優れた業績を残し、のちの国学研究の基礎を築いた。
- 4 『万葉考』は賀茂真淵が著した『万葉集』の註釈書で、簡明な註釈とともに独自の万葉集論を記している。賀茂真淵の著としては、仏教や儒教などの外来思想を排して日本独自の精神の尊重を説いた『国意考』の他、研究書として『冠辞考』『祝詞考』などがある。
- 5 本居宣長は伊勢松坂で医者として開業するかたわら、古典の研究にいそしみ、やがて賀茂真淵に入門し、『古事記伝』を30年余の歳月を費やして完成させた。宣長は自宅を鈴の屋と称してそこで門人の育成に尽力した。

- 6 桂園派は京都の江戸時代後期の歌人香川景樹門下の流派で、感情を自然に詠むことを尊重し、古今調を理想とした。その他桂園派の歌人には熊谷直好・木下幸文らがいる。
- 7 大田南畝は蜀山人、四方赤良などと号した江戸の狂歌師で、天明期の狂歌全盛期の代表的な作者であり、この頃の唐衣橘洲・朱楽菅江らとともに狂歌の三大家とされる。大田南畝の作品に、『万載狂歌集』がある。
- 8 与謝蕪村は摂津の生まれで、江戸で書画や漢詩、俳諧を学んでのち京都に住した。芭蕉を敬慕し、絵画的・印象的な作風の歌を作り、天明調俳諧で知られる。文人画家としても著名であり「十便十宜図」などの作品を残している。
- 9 小林一茶は文化・文政期に活躍した俳人で、俗語や方言をそのまま用いて生活感情を率直に詠み、生き物への情感に満ちた人間味豊かな作品を残した。著作には『おらが春』などがある。
- 10 『誹風柳多留』は前句付の点者として活躍していた柄井川柳の選んだ句から、呉陵軒可有らが編んだ雑俳撰集である。前句付とは雑俳のうちの付句の5・7・5が独立したもので、柄井川柳はその批評点をつける宗匠であった。

[3]

解答

- a 浮世草子 b 井原西鶴 c 近松門左衛門 d 洒落本 e 狂歌
 f 山東京伝 g 読本 h 滝沢馬琴 i 滑稽本 j 式亭三馬 k 合巻
 l 人情本 m 柳亭種彦 n 為永春水

解説

江戸時代の文芸に関する問題である。

- a・b 浮世草子は町人の生態や人情を描いた小説であり、表現には俳諧の手法も取り入れられ、写實的に著されている。浮世草子の始まりは、1682（天和2）年に刊行された井原西鶴の『好色一代男』とされる。井原西鶴は初め西山宗因について俳諧を学び、一時は談林派の中心人物であったが、その表現に飽き足らずに、西山宗因の死後、小説に転じた。西鶴の小説の分類としては、好色物・武家物・町人物の他、『本朝二十不孝』『西鶴諸国ばなし』など雑話物もある。
- c 近松門左衛門は武士の出で、貞門俳諧を学び、天和・貞享頃に至って浄瑠璃・歌舞伎作者として登場した。浄瑠璃では宇治嘉太夫・竹本義太夫の、歌舞伎では名優坂田藤十郎の作品を執筆した。
- d 洒落本は遊里を題材にとった通俗小説で、洒落本の中では「通」「粋」などが重視された。
- e 狂歌とは俗語を用いて、機知による滑稽を詠み込んだもので、形式的には短歌と同じである。江戸時代には多くの狂歌作者が出た。安永・天明期から江戸で流行し、大田南畝（蜀山人）らが独自の世界を築いた。
- f 山東京伝は戯作者で江戸の京橋に住む伝蔵という意味からこの名を称した。浮世絵師でもあった。黄表紙・洒落本の作者として活躍していたが、1791（寛政3）年作の『仕懸文庫』が寛政の改革で処罰され、以降は読本作家に転じた。
- g・h 読本とは、絵を中心とする草双紙に対して、文章を主体としたもので、勧善懲悪を主

旨とした歴史的伝奇小説などが書かれた。仮名草子の流れを引いて上方で起こり、これらは前期読本とされる。この頃の代表的な作品には上田秋成の『雨月物語』『春雨物語』がある。読本は寛政期頃から江戸で盛んになり、山東京伝や滝沢馬琴が活躍した。滝沢馬琴は長編作品『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』で名を馳せた。これらの作品は根本に儒教や仏教に基づく勸善懲悪・因果応報の思想がある。

- i・j 滑稽本は庶民の生活の滑稽を会話体で記した小説。1802（享和2）年の十返舎一九が書いた『東海道中膝栗毛』などが主な作品である。代表的な作者として十返舎一九の他、『浮世風呂』や『浮世床』を著した式亭三馬がおり、これらの作品は、庶民の社交場である風呂屋や床屋を舞台として、彼らの生活の様子をユーモアを交えて写實的に描いている。
- k・m 黄表紙を何冊か綴じ合わせて合冊にしたものが合巻で、天保期に最盛を迎えた。代表的な作品としては柳亭種彦の『修紫田舎源氏』が挙げられる。この作品は『源氏物語』を下敷きに時代を室町時代に設定して御家騒動を描いているが、実際には江戸幕府の大奥生活を描写した作品で、のちに幕府の弾圧を受けた。
- l・n 洒落本が弾圧されたあと、男女の愛情を描いた読物として出たのが人情本である。代表的な作家として『春色梅児誉美』を書いた為永春水が挙げられる。1842（天保13）年に幕府が風俗取締りを強化したことから春水は絶版処分を受け、これがもとになって病死した。

【4】

解答

問1 ア 7 イ 2 ウ 5 エ 3 オ 4 問2 4 問3 3

解説

問1

- ア 日光東照宮は徳川家康を祀る神社で、権現造の代表的な遺構とされる。
 - イ 桂離宮は後陽成天皇の弟である八条宮智仁親王の別邸であり、書院造に茶室の草庵風も合わせた数寄屋造と、これを取り巻く回遊式庭園とで構成される。
 - ウ 狩野探幽は狩野永徳の孫であり、16歳で幕府の御用絵師となった。代表的な作品には「大徳寺方丈襖絵」がある。
 - エ 土佐光起は室町時代より途絶えていた宮廷絵所預となり土佐家を再興した。作品に「秋草鶉図屏風」がある。
 - オ 俵屋宗達は京都の町衆出身。大和絵の装飾性を強調した絵画を描いた。
- 問2 心学を興したのは太宰春台ではなく、石田梅岩である。心学は江戸時代中期に創始された庶民教学で、商業行為の正当性を主張し、儉約・正直などの町人の道徳を説いた。著書に『都鄙問答』がある。太宰春台は護園学派の儒者である。
- 問3 葛飾北斎は大首絵の手法を駆使した役者絵ではなく、風景版画を大成した。北斎は、浮世絵だけでなく、狩野派・土佐派・琳派・洋風画・中国画などあらゆる画法を学んで独自の画風を確立し、大胆な構図の「富嶽三十六景」などを残した。喜多川歌麿は、鳥山石燕の弟子であったので、当初は鳥山豊章とも名乗っていた。独自の美人画を描き始めた歌麿は、1791（寛政3）年、胸部から上だけの大首絵を発表して好評を博し、美人画の全盛期を築いた。役者絵の作者として著名なのは、東洲斎写楽である。写楽は多数の作品を残したが、実

際に活動したのは、1794（寛政6）年から翌年にかけてのわずか1年間のみという謎の絵師である。大胆なデフォルメで「市川いちかわ鰻うなぎ蔵くら」などの個性的な役者絵を描いた。

5章－2 江戸時代の学問

問題

■確認問題

- 1 藤原惺窩
- 2 山崎闇斎
- 3 中江藤樹
- 4 中朝事実
- 5 大和本草
- 6 貞享暦
- 7 西洋紀聞
- 8 山脇東洋
- 9 志筑忠雄
- 10 芝蘭堂
- 11 ハルマ和解
- 12 蛮書和解御用
- 13 石田梅岩
- 14 本多利明
- 15 夢の代
- 16 安藤昌益

【1】

■解答

- 1 う
- 2 う・え
- 3 寺子屋
- 4 い
- 5 昌平坂学問所
- 6 あ・う
- 7 郷学
- 8 あ・い

■解説

中世末から近世にかけての教育機関に関する問題である。基本的な問題がほとんどなので、確実に押さえておきたい。江戸時代の学問の特色を押さえるとともに、藩校や私塾については種別や所在地、関係人物を整理しておこう。

- 1 『節用集』は室町時代中期に刊行された日常語句を類別した辞書で、著者は不明。一方、室町時代初期に成立したとされる『庭訓往来』は書簡形式の初級教科書であり、武士・庶民の日常生活に必要な文例と語を盛り込んでいる。江戸時代には寺子屋の教科書として広く流布した。著者は玄恵とされるが、確証はない。
- 2 文治政治は徳川家康以来の武断政治に対して、儒学、とくに朱子学の理念を中心に法律や制度を整え、民衆を教化し、幕府の権威と身分社会の秩序を保とうとする政治の在り方である。文治政治は徳川家光死後の由井正雪の乱以降に始まり、5代将軍徳川綱吉の政治、新井白石の正徳の治に見られる政治をその展開とする見解が一般的である。
- 3 寺子屋は江戸時代の庶民教育機関であり、通常20～30人の規模から大きいもので数百人にも及んだ。武士、僧侶、神官などが教師となり、主に読み書き、そろばんを教えた。江戸時代を通じて開設された寺子屋は全国で1万校以上にも及び、幕末にはさらに増加したといわれる。
- 4 朱子学は中国宋代に朱熹によって大成された儒学の一派である。日本へは鎌倉時代に五山の僧によって伝えられ、江戸時代初期に林羅山が幕府に仕えてから、大義名分論がとくに重んじられるようになった。幕藩体制の動揺の中で林家が振るわず、古学派や折衷学派が盛んになったが、松平定信が老中に就任した際、幕藩体制の強化をねらう幕府は朱子学を正学とし、朱子学をもって官吏登用試験とすることを定めた。
- 5 昌平坂学問所は林羅山が開いた家塾弘文館を基礎とし、5代将軍徳川綱吉の時に上野忍ヶ岡から湯島に移転した際に聖堂学問所として整備された。寛政異学の禁を受け、1797（寛政9）年には幕府直轄の学問所となり、のちに昌平坂学問所と呼ばれた。

- 6 日新館は1664（寛文4）年、会津藩の保科正之ほしなまさゆきが私塾を藩校に取り立てて稽古堂と称したことに始まる。明倫堂は1792（寛政4）年、金沢に作られた加賀藩の藩校である。また1749（寛延2）年、名古屋に作られた尾張藩の藩校の名称も同じく明倫堂である。また、明倫舎は1782（天明2）年、手島堵庵てしまとあんが京都に創設した心学舎である。
- 7 郷校（郷学）には、藩士教育のためのものと庶民教育のためのものと2つの系統がある。前者は藩学に準ずるもので、後者は藩で経営する場合と民間で経営されたものもある。岡山藩の閑谷学校しずたには1668（寛文8）年に池田光政が創設したもので、藩営郷学の最も早い例である。
- 8 適塾てきは1838（天保9）年、緒方洪庵おがたこうあんが大坂に開いた蘭学塾で、大村益次郎・橋本左内さない・大鳥圭介・福沢諭吉らの人材を輩出した。

【2】

解答

- 1 ア 経済録 イ 中井竹山 ウ 手島堵庵 エ 人足寄場 オ 芝蘭堂
 2 海保青陵 3 山片蟠桃 4 キリスト教以外の漢訳洋書の輸入の禁緩和
 5 蛮書和解御用 6 復古神道

解説

- 1
 ア 太宰春台は荻生徂徠の流れを組む古文辞学派の儒者であり、経済学を研究した。商業を積極的に活用して、藩専売の実施を主張するなど現実に即した経世論を説いた。著書に『経済録』『経済録拾遺』がある。
- イ・3 山片蟠桃は江戸時代の商人であり、豪商升屋の番頭として活躍した。懐徳堂の中井竹山に儒学を、麻田剛立こうりゅうに天文学を学び、封建制の下にあつて合理主義を展開した。山片蟠桃の思想はその著書『夢の代』に示されており、卓抜した経済論や仏教・迷信の否定、徹底した無神論（無鬼論）は注目に値する。
- ウ 江戸時代中期の思想家石田梅岩は商人の生活意識に基づいた日常倫理の実践を説き、心学と呼ばれる学派を創始した。手島堵庵は若くして梅岩の弟子となり、心学の道場である明倫舎などを建設し、心学の普及に尽力した。
- エ 中沢道二なかざわどうには京都の機織りを家業としたが、40歳を過ぎて手島堵庵の弟子となり、石門学派の心学の修行に励んだ。のちに堵庵の命で江戸に下り、教化活動を行った。1790（寛政2）年に松平定信が江戸石川島人足寄場を建設すると、依頼されて同所の講師として活躍した。
- オ・5 大槻玄沢は江戸時代中・後期の蘭学者で、江戸に蘭学塾の芝蘭堂を開いて蘭学教育に当たった。蛮書和解御用わげこようは、1811（文化8）年に幕府の天文方かげやすの高橋景保の意見により設置された蘭書の翻訳機関であり、多くの洋学者を集めて幕府の統制下で西洋の科学技術の研究に当たらせた。大槻玄沢の流れをくむ蘭学者宇田川榕庵うだがわようあんは、化学書『舍密開宗』せいみかいそうを著したが、これは蛮書和解御用における成果である。1855（安政2）年には蛮書和解御用に代わり洋学所が新たに設置され、1856（安政3）年に蕃書調所ばんしょしらべしょと改称、翌年から開校した。
- 2 海保青陵かいほせいりょうは、江戸時代中期・後期の経世家であり、荻生徂徠—太宰春台の系譜と蘭学の間接的な影響によりその思想は形成された。万物を「シロモノ」と見、君臣の道を「シロモ

ノウリカイ」すなわち商売の道と同様であるとし、その財政政策は儉約ではなく、積極的な「富国策（＝重商主義的政策）」であるべきと説いた。著書に『稽古談』がある。

- 4 8代将軍の徳川吉宗は実学を奨励し、漢訳洋書の輸入制限を緩和した。漢訳洋書とは中国で漢文に翻訳された洋書のことである。キリスト教に関係するもの以外の輸入が許可された。また吉宗は、青木昆陽や野呂元丈にオランダ語を学ばせた。
- 6 江戸時代後期の国学者平田篤胤あつたねは本居宣長没後の門人を自称し、復古神道を形成した。復古神道は主として地方の豪農や神官に広まり、「草莽そうもうの国学」として幕末の尊王攘夷運動に影響を与えた。

【3】

解答

- ① シ ② カ ③ ニ ④ ヘ ⑤ ハ ⑥ ス ⑦ ヌ ⑧ キ
⑨ ネ ⑩ ウ ⑪ タ ⑫ サ

解説

江戸時代の儒学に関する問題である。人名・書名等細かな部分もあるが、儒学の系譜をしっかり押さえておこう。

- ① 藤原惺窩せいこは初め相国寺の僧となり、のちには朱子学を学んだ。厳しい現状認識と理の普遍性を認める立場から、実践的な倫理学説を説き、五山禅僧などの教養であった儒学を独自に体系化し、近世儒学の祖となって京学派を興した。著書に『千代もと草』『四書五経俊訓』などがある。
- ② 林羅山（道春）は初め建仁寺の僧だったが、朱子学の研究を志し、藤原惺窩の門人となった。徳川家康から徳川家綱まで4代にわたる将軍の侍講を務めた。上野忍ヶ岡に家塾を建てたが、これがのちの昌平坂学問所のもとになった。多数の漢籍の訓点・出版、経書講述など大きな足跡を残し、神儒一致の見地から日本史の叙述を試み、『神道伝授』『本朝神社考』などを著し、日本固有の信仰と朱子学説との調和をはかった。主著は『本朝通鑑』ほんちょうつがん『羅山文集』。
- ③ 林鶯峰がほう（春斎）は羅山の子で、徳川家光に仕えて五経を講じ、幕府外交の機密にも参与した。羅山とともに『寛永諸家系図伝』『本朝通鑑』などを編纂した。
- ④ 『本朝通鑑』は林羅山の『本朝編年録』の草稿に林鶯峰が手を入れたもの。1670（寛文10）年成立。江戸幕府が林家に命じて編纂させた神代から1611（慶長16）年までの漢文の編年史。
- ⑤ 林信篤ほうこう（鳳岡）は4代将軍家綱から8代将軍徳川吉宗までの侍講。1691（元禄4）年林家の家塾が湯島に移って聖堂学問所となるに及んで大学頭に任命され、以後代々林家がこれを世襲した。学問的には家学を伝えたのみで、新井白石には疎んじられた。
- ⑥ 南学は戦国時代末に南村梅軒みなみむらばいけんを始祖として土佐国に興ったとされ、同地で栄えた朱子学派。海南学ともいう。江戸時代初期に谷時中が実践的な儒学としての基礎を固め、門下の野中兼山けんざんは土佐藩政に参与し、山崎闇斎は京都に出て門戸を張った。
- ⑦ 崎門学派は、海南学派より出た江戸時代前期の儒者山崎闇斎が首唱した朱子学一派。朱子の思想・倫理規範の教条を厚く信奉し、それを日常生活の中で厳格に実践して道義を維持するのがその趣旨である。山崎闇斎の後は崎門三傑といわれる佐藤直方・浅見綱斎けいさい・三宅

尚齋しょうさいのほぼ3派に分かれた。岡田寒泉かんせんは佐藤直方むらじに連なる村士玉水むらじに学を受け、1789（寛政元）年、幕府の儒官に抜擢された。柴野栗山とともに異学の禁について画策するところがあり、柴野栗山・尾藤二洲・岡田寒泉（のち代わりに古賀精理）の3人は寛政の三博士と称される。

- ⑧ 昌平坂学問所は、1630（寛永7）年に設けられた、上野忍ヶ岡の林羅山の家塾弘文館に始まる。1691（元禄4）年、神田湯島に移転して拡充され、聖堂学問所となった。松平定信が老中に就任すると、柴野栗山・岡田寒泉を聖堂付儒者に登用して人材強化をはかり、1790（寛政2）年に林家に対し朱子学擁護の達しを伝え、他の学派は採用しないと声明した。これが寛政異学の禁である。これを機に学制・施設が一新され、藩士・郷士・牢人の聴講入門が許可され、幕府の外から尾藤二洲・古賀精里が招かれた。1793（寛政5）年には、幕府の聖堂干渉のりもりに反対であった大学頭林信敬のふたかが病死し、嗣子がなかったため、幕府は美濃岩村藩主松平乗蓋の子である述齋を相続人に選び大学頭に任じた。そして、林家の家塾を切り離して、1797（寛政9）年に幕府直営の学問所である昌平坂学問所とした。
- ⑨ 賀茂真淵かものまぶちは遠江伊場村の神職の家に生まれ、荷田春満かだのあずまろに国学を学び、1738（元文3）年に江戸に出て学塾を開いた。『万葉集』を中心に日本古典を広く研究し、儒教・仏教などの入る以前の日本古代精神、すなわち古道を復活させようと復古主義を唱道。主著に『万葉考』『歌意考』『国意考』『祝詞考』などがある。
- ⑩ 塙保己一はなわ ほきいちは幼少時に失明するが、江戸に出て賀茂真淵らに国学を学び、和漢の学に精通した。1783（天明3）年に盲人の最高位である検校となった。1793（寛政5）年に幕府の保護の下に和学講談所を建て、『群書類従』『武家名目抄』などの編纂、六国史・二十一代集の校訂などを行った。
- ⑪ 和学講談所は、1793（寛政5）年に塙保己一が幕府から江戸麹町に宅地を借り受けて開設した、和学の教授や文献史料の収集整理を行う学問所である。屋代弘賢やしろうかたらを中心に『群書類従』『続群書類従』『武家名目抄』などを編纂した。保己一死後も子孫に継承されて編纂は続けられたが、1868（明治元）年に廃止された。
- ⑫ 『群書類従』は正編530巻666冊から成る。他に目録1冊、続編1000巻1185冊がある。日本の古書を神祇・帝王以下25の部に分類して編纂した大叢書であり、1779（安永8）年に編纂を開始した。正編は1819（文政2）年に刊行を完了し、続編は1911（明治44）年に刊行を完了した。

【4】

解答

- A [1] 50 [2] 42 [3] 61 [4] 54
 [5]・[6] 36・52〈順不同〉 [7] 16 [8] 46 [9] 66
 [10] 43 [11] 68 [12] 45 [13] 38 [14] 58 [15] 25
 B e 通詞 f 解体新書 g 重訂解体新書 h 尚齒會
 C (ア) 五臓六腑 (イ) 蔵志 (ウ) 腑分け (エ) ハルマ和解
 (オ) 高橋景保 (カ) 蛮社の獄 (キ) 社会主義

解説

[1]・[2]・[3] 江戸幕府は成立当初からヨーロッパ人との通商を制限しようとしていたわ

けではない。徳川家康は日本人の豪商に朱印船貿易を認めるなどむしろ積極的で、1609（慶長14）年にはオランダに、1613（慶長18）年にはイギリスに自由貿易の許可を与えて、両国とも東インド会社が平戸に商館を開いて入港した。

しかし、キリスト教信徒の団結を恐れた幕府は、1612（慶長17）年に幕府の直轄地に禁教令を発し、翌1613（慶長18）年にはこれを全国に拡大した。そして、禁教を徹底するため、日本人の海外渡航やヨーロッパ人との貿易を制限する方針に転じたのである。1623（元和9）年にイギリスが撤退、1624（寛永元）年にイスパニア船の来航を禁止したのに次いで、1639（寛永16）年にポルトガル船の来航を禁止すると、残ったオランダも1641（寛永18）年に商館を平戸から長崎に移させ、ここにいわゆる鎖国体制が完成した。なお、問題文は「オランダ人が」となっているが、正確には「オランダ商館（オランダ東インド会社の商館）が」とすべきところである。

e 長崎でオランダ語の翻訳と税務に当たった幕府の役人を通詞という。日本にヨーロッパの学問（蘭学）を伝える先駆的な役割を果たした。『暦象新書』を著して、ニュートンの万有引力説やコペルニクスの地動説を紹介した志筑忠雄しづきただおなどが有名である。志筑は、ドイツ人医師ケンペルの著書『日本誌』の一部を翻訳した際、「鎖国論」と題して鎖国の語を生み出した人物としても知られる。

(ア)・(ウ) 中国医学（漢方）では、陰陽五行説に対応させる形で身体の様々な機能を5つの臓と6つの腑に分けて捉える。いわゆる五臓六腑で、五臓が肝・心・脾・肺・腎、六腑が胆・小腸・胃・大腸・膀胱・三焦である。五臓六腑はあくまでも身体の機能であって、具体的な臓器をさすものではない（例えば心といっても血液循環機能全般のことであり、心臓のみを意味しているのではない）。それだけに、臓器を特定するという西洋医学の手法は斬新なものであった。なお、解剖のことを当時は腑分けといった。日本史というよりも語彙力を試す部類の問題である。

[4]・(イ) 日本で初めて解剖を行った人物が、古医方の山脇東洋である。古医方とは、中国医学の中で朱医学（朱子学に基づいた医学）を理論に走りすぎだと批判して、臨床を重視した漢代の医術に立ち戻ることを求めた流派で、山脇東洋はその立場から五臓六腑説に疑問を持っていた。そこで、1754（宝暦4）年に京都所司代の許可を得て刑死人の解剖を行い、1759（宝暦9）年に『蔵志』を刊行した。

[5]・[6]・[7]・f・g 1771（明和8）年、若狭小浜藩医であった杉田玄白は、豊前中津藩医の前野良沢らとともに、江戸の小塚原（現在の東京都荒川区南千住）の刑死場で解剖を見学した。その時、別の経緯で偶然にもオランダの解剖書『ターヘル=アナトミア』（ドイツ人クルムスの『解剖図譜』をオランダ語訳したもの）を手にして2人は、図の正確さに驚いて日本語訳を決意した。当時はまだ蘭日辞典もなく、杉田玄白はオランダ語が読めないというありさまであったから作業は困難を極めた（その時の苦勞を記したのが杉田玄白の『蘭学事始』である）。しかし、1774（安永3）年には完成し、『解体新書』として刊行された。訳述者としては他に中川淳庵・桂川甫周ほしゅうらがいる。桂川甫周は、ロシア使節ラクスマンの船で帰還した大黒屋光太夫から北方での体験を聞き書きし、『北槎聞略ほくさぶんりやく』を著した。また、挿絵を描いたのが《語群》19に名が見られる西洋画家の小田野直武である。

さて、上に述べたような事情から『解体新書』には誤訳も多かった。できればに満足しな

かった玄白は弟子の大槻玄沢にこの改訂を命じ、この結果1826（文政9）年に『重訂解体新書』が刊行された。これは用語集にも収録されていないので、解答できなくても仕方がない。[7]は杉田玄白・前野良沢の「門下」というところから答えられるはずだ。大槻玄沢は江戸に私塾芝蘭堂を開き、蘭学の入門書『蘭学階梯』を著した。また、新元会と呼ばれるオランダ正月を開催したことでも知られる。

(エ) 日本最初の蘭日辞典を完成させたのは、大槻玄沢の門人に当たる稲村三伯である。オランダ人ハルマの手になる『蘭仏辞典』を翻訳し、1796（寛政8）年に『ハルマ和解』として刊行した。「和解」とは、外国語を日本語（和語）で解釈するという意味である。

[8] 15 衛生・26 骨髄・37 大腸・46 軟骨の4 択くらいに絞って、後は運を天に任せるしかない。但し、本問の慶應大（商）型の出題形式では、知らない内容でも選択肢を絞り込むことはできるから、最後まで諦めないことが肝心だ。

[9]・[12] 1823（文政6）年、オランダ商館医として出島に来日したシーボルトは、翌年から長崎郊外に鳴滝塾を開いて医学の講義と診療を行い、蘭学の発達に大きく貢献した。塾生には、後述する高野長英や、後に幕府直轄の医学所となる種痘所を江戸に開いた伊東玄朴らがいる。

[10] 鎖国下の江戸時代ではあるが、オランダ人以外のヨーロッパ人も多数来日している。とくに、医学の本場であるドイツからは、本国の国家建設が立ち遅れていたため、オランダ商館医として採用されて来日する機会が多かった。シーボルトや、先に触れたケンペルはドイツ人である。

また、スウェーデン人医師のツンベルクも同様で、帰国後に『日本植物誌』を著した。

[11]・(オ) シーボルトは1828（文政11）年に帰国しようとしたが、その際に船が長崎沖で難破してしまい、荷物検査が行われた結果、禁制品であった日本地図を持ち出そうとしていたことが発覚した。シーボルトには翌年に国外追放処分が下り、地図の入手に協力した幕府天文方の高橋景保は投獄され牢死した。シーボルト事件である。

高橋景保の父は同じく天文方を務めた高橋至時で、1798（寛政10）年に寛政暦を作成した。高橋景保は伊能忠敬の測量に協力し、忠敬が亡くなった3年後の1821（文政4）年に、弟子らとともに『大日本沿海輿地全図』を完成させている。シーボルトに贈った地図はその縮小版である。

シーボルトは、帰国後『日本』を随時刊行した。1844（弘化元）年のオランダ国王ウィレム2世による開国勸告の親書も起草している。1858（安政5）年に日蘭修好通商条約が結ばれると国外追放処分は解除となり、翌1859（安政6）年に貿易会社の顧問として再来日、1861（文久元）年には幕府顧問にもなって、1862（文久2）年に帰国した。

[13]・[14]・[15]・h・(カ) 尚齒会は、高野長英・渡辺崋山ら江戸の蘭学者たちの集まりである。表向きは「齒を大切にする（尚齒）年寄りの集まり」と称し、学問・研究だけでなくヨーロッパの情勢などについても意見を交換し合った。

1837（天保8）年、日本人漂流民の送還と通商の交渉を目的に来航したアメリカ船モリソン号が、幕府によって撃退されるという事件が発生した。モリソン号事件である。翌1838（天保9）年、高野長英は『戊戌夢物語』を、渡辺崋山は『慎機論』を著して幕府の対応と鎖国政策を厳しく批判した。幕府は長英らが小笠原渡航を企てていることを理由に尚齒会の

人々を捕え、その際に批判の書を発見して、渡航計画は無実であったものの、幕府批判によって処罰した。これを蛮社の獄という。高野長英は永牢（今でいう無期懲役）とされ、一度は脱獄したものの追っ手に襲われて自害、渡辺崋山も国元の三河田原藩で永蟄居の処分となり自害した。こうして、シーボルト事件などと合わせて蘭学（洋学）研究は厳しい制限を受け、政治運動と直接結びつかない医学・地理学などの実学が主流となっていくことになる。

[13] はシーボルトの「塾生の一人」ということから高野長英、[14] は「画家」とあるので渡辺崋山と判別できる。渡辺崋山は文人画「鷹見泉石像」の作者としても有名である。

[15] の小関三英^{こせきさんえい}は難問か。長英・崋山らが逮捕されたと聞き及び、連坐を恐れて自害した。

(キ) 大逆事件とは、1910（明治 43）年に幸徳秋水・管野スガら 26 名の社会主義者・無政府主義者が天皇暗殺を計画したとして逮捕・起訴され、翌 1911（明治 44）年にうち 12 名が死刑となった事件である。これにより、資本主義経済の発達とともに高揚を見せていた社会主義は壊滅的な打撃を受け、「冬の時代」を迎えた。石川啄木は評論「時代閉塞の現状」において、国家権力によるこうした言論・思想の弾圧を批判している。

J3MA/J3MB/J3M
早慶大日本史明治史特講
早慶大日本史文化史特講
早慶大日本史



会員番号	
------	--

氏名	
----	--

不許複製